の話で盛り上がったり、プリクラとってはしゃいだり、ノーテンキに生きてきた。まあ要するに、『お子ちゃま』だったわけ。

そんな生き方を、わたしはリセットしようと思っていた。

これからすてきなレディになるためには、中学時代って、大事だと思う。勉強もしなくちゃいけないし、見た目もきれいにみがきたいし、恋もしたい。そのためには、特別な友だちが必要だ。かしこくて、クールで、お互い尊敬し合える子がいい。

よし。新しい中学で、すてきな友だちをつくって、青春を謳歌しよう！

しかし、そんなわたしの思惑は、みごとにぶちこわされた。

引っ越した先は、なんと四国の山あいの、小さな村だった。つまり、ド田舎、へんぴな土地、ジャングル的未開発地帯。

タクシーの中から、それはそれはすてきな大自然が見渡せた。山や川や畑や、まぬけな顔のかかしを見ながら、「なんということでしょう！」と、わたしはテレビのナレーションふうに、なげいてみた。

中学校はみすぼらしい木造で、やたらと校庭は広くて、全校生徒五十人程度という少なさ。

こっちの中学の入学式に間に合わなかったわたしは、教壇の上にたたされて、さらし者となった。

「東京から転校してきた、井上梨奈さんだ。みんな、仲良くしてやってくれよ」

好奇心むき出しの、すばしっこそうな目が、いっせいにわたしに向けられた。動物園のサルを見るみたいに、みんなの視線はじろじろと無遠慮だった。

健康的に日焼けした、顔、顔、顔。男子はみんな坊主頭。女子はほとんどショートカット。もしくは今どきあり？の三つ編みおさげ。いなかくささ、満載。

サルはそっちでしょ。わたしはそういってやりたかった。

おまけにみんなはだしだし！

「この学校ではね、四月から十月まで、校舎の中ではみんなはだしで過ごすんだ。健康にもいいし、足の裏を刺激するのは、脳の活性化にもいいんだぞ」

野ザルの中のボス、というより、ゴリラみたいにたくましい担任の先生がそういった。なにを根拠にそんなことがいえるのか、わたしにはまったくの疑問だった。

「さあ、井上さんも、うわぐつを脱いでごらん。気持ちいいから」

いやです。不潔だし、気持ち悪いし、足をけがするかもしれないし、だいいちカッコ悪いし。

わたしはその言葉を口にせず、断固とした目つきだけで、